

◇ 目次

1. こころのありか 青森ねぶた健康研究所 瀬谷 司 …1
 2. みなと・まち・ねぶた～青森の歴史的節目をめぐる覚書き 青森大学客員教授 関 晃子 …2
 3. 観光文化研究センター活動報告 青森大学附属総合研究所 研究員 喜來大智 …5
 4. SDGs 研究センター活動報告 SDGs 研究センター センター長 藤 公晴 …8
 5. SDGs 研究センター薬学部・活動報告－令和3年度・薬学部卒業研究発表会 SDGs 研究センター研究員 薬学部 大越 絵実加 …11
 6. ねぶた解体・特定非営利法人ほほえみの会と連携「青森ねぶた SDGs プロジェクト」 青森大学附属総合研究所 研究員 喜來大智 …13
 7. 本年度の幸畑プロジェクト－ハッピードラッグ青森幸畑店とのコラボ 社会連携センター員 社会学部 櫛引 素夫 …14
- ▽総研日誌 …16
- ▽編集後記 …16

1. こころのありか

医薬系大学は医薬学教育を標榜する機関であり、教育と研究を責務とする。医薬学の内容は人間社会と不可分のため、時代・場所・為政者に翻弄される。これはエッセイなのでそのような網羅的な背景を吟味して叙述するものではない。生命科学の一研究者の立場から見える基礎教育・研究の在りかに触れてみる。一般の理系大学と医薬系大学には真理を物質・生物全体に広げるかヒトと疾患に絞り込むかの相違はあるがサイエンスを基盤にして実験的裏付けを基調にする点は共通すると云ってよい。従って、スキルの修得は必須になり、これは日夜の修練を要する。医学部であろうと、また頭がよくても、遊んでいてはダメである。私は長く大学院生の研究指導に携わってきたが、実験を根気よく続ける能力は学歴と必ずしも相関しないようである。研究はそれ自体が世界を構築し、生涯の伴侶になる。出世など世俗の動機で研究すると多分辛い。

しかし、世界に飛躍するとき、研究に没頭しうる能力だけではダメなようで、コミュニケーションの能力も必要になる。臨床では基礎と違う価値観があり、そつのないコミュニケーション能力を養うことは重要であろう。両方を養えば理想的である。しかし、処世術だけで基礎研究の世界を凌ごうとすると価値観の違いに苦しむことになる。あくまで研究オリエントのベースがあった上でのコミュニケーション能力である。医学部出身者が泥まみれの実験に厭わずに取り組むようなら日本も第 2、第 3 の Yamanaka を生むかもしれない。

閑話休題。北大時報（H24. 10）の博士学位記授与のページ（47 page）を見て驚いた。9月の学位取得者 101 名のうち 57 名が（名前から判断して）外国人である。日本人は 44% で、中国名の人が 50% 近くを占める。私は国粹主義でこのことを非難するつもりはない。もともと極東の島国で吹き溜まりの文化を涵養して来たのが日本文化であり、それを醸成したのが国史である。今の名前が外国人でも日本に学び、そ

青森ねぶた健康研究所 瀬谷 司

こで生活圏を得れば次世代からは日本人になる、弥生時代以来そうして日本が形成されてきた。今が、飛鳥・天平以来の渡来人時代となっても私はそれに抵抗は無い。他に少子・高齢化の解決策などあろうはずもない。問題はそのありようである。

かつて日本は白村江の戦いがあり、元寇があり、昭和の敗戦があつてそれでも外国の侵攻は免れた。紀元 3 世紀以来の史書に見られる歴史の中で日本のアイデンティティを言語と文化で共有してきた。こんな例は世界に無い。中華の王朝は勿論、ローマやカルタゴ、欧州諸国の起源、ユダヤ人やソグド人を挙げるまでもない、歴史は 1 つの国と文化が長く続かないこと、必ず滅びが来ることを教えてくれる。だが、最初から多民族を許容した米国や豪州など移民国家も民族を超えた理想とはほど遠い。その中で日本が独自の言語とひとつの国を 2000 年以上堅実に保持して来たことは希有と云ってよい。それは渡来人が固有の文化を在来文化（言語を含めて）に融和して国造りしてきたからではないのか？ 断じてその逆ではない。

日本語は膠着語で、文法の基盤はアルタイ語である。外国文化が外国語で入ってきてもそれを漢字・カタカナなどでめ込み式に「てにをは」文法体系に取り入れて日本語化した。会話が英語や中国語で語られることはない。「やまとことば」は卑弥呼の頃から変わっていない。私は何が言いたいのか、日本の国力が落ちていく以上、これからも米中以外に言語は文化としていくらでも入る。しかし、日本語を話し、単語を借入して表記する限り日本語は残り文化は継承される。肌の色が黒かろうが白かろうが混血しようが日本語で意志を疎通する者は日本人である。日本で学位を取り、生活を望むなら日本語で表記し、日本の文化を理解し、それを自分と快く融和することを学んで欲しい。日本の中に異文化圏を作るべきでない。世界がどう変わろうと、日本で生きるなら英語や中国語を公用語として使って欲しくない。だが、

それは日本語を話す者は外国人より偉いといった差別や偏見に繋がってはならない。

私は科学者だからサイエンスは英語で読み書き、論文を英語でまとめる。このことを「太平洋戦争の当事者に人材を欠いたせいだ」とは思っていない。人は既得権を持つとそれを保持しようとする。ありようは人である事の愚かしさであり、米国と日本の経済格差がわからぬほどの衆愚である。米国が勝ったのはその当時の体質がまだしも民主的であり、日本は人材が能力を発揮できる体制でなかった；形式主義と虚礼体質を変えてなかった；ことにある。人材が発言権を持ち国力の正当な評価ができれば戦争を回避したであろうか？サイエンスの多くが英語になっているのは欧米文化に先進の気鋭があったため、それは今でも逆転していない。私はそれを認めるから論文は英語で書き、欧米誌に投

稿する。ことサイエンスに関して国際化は必須であり、日本も研究は英語化する必要があると思う。

しかし、日本文化に関して私は些かの劣等感もない。この文化はそれを離れてみても素晴らしい。何より文化に差異はあっても優劣はない。役人や政治家は朝令暮改を繰り返して国は疲弊しているが、日本を構成する多くの人々は謙虚で慎ましく、自己表現が下手だがどこか逞しく生きている。それは文化に内在する。その文化の中で利己主義、自己本位、傲慢、ご都合主義を広げてもらっては困る。謙虚には謙虚、質朴には質朴で対応すべきである。大学のかたちは混迷にあるが、人材の養成は大学の重要な役目であることに変わりはない。教育の風土は目先の利害や単なる形式・技術でなく、「こころ」を伝えることが大切なのだと思う。

2. みなと・まち・ねぶた～青森の歴史的節目をめぐる覚書き

青森大学客員教授 関 晃子

はじめに

中世、青森は「外浜」(1)と呼ばれた地にあった。平安後期の歌人である西行(さいぎょう 1118-90)が「むつくの おくゆかしくぞ おもほゆる つぼのいしづみ そとはまかせ」(「山家集」)と詠んだごとく、外浜は容易には訪れることのできない歌枕の地とされていた。まだ歴史上に「青森」は出てこない頃のことである。

弘前藩によってこの外浜地帯にあらたな町づくりがはじめられたのは、今から約400年前、江戸時代の初め頃に遡る。これがまさに今の青森の起源である。しかしながら、この青森の誕生からまもなく400年を迎えるということについては、一般にはどの程度知られているだろうか。

港町として発展した青森のまちは、藩政時代以来幾度も大火に見舞われた。なかでも昭和20年(1945)7月28日の青森空襲により市街のほとんどが焦土と化すという甚大な被害を受けた。しかし終戦後復興が

進み、昭和22年(1947)には「戦災復興港まつり」が開催される。この祭りはねぶたの運行を主とするもので、人びとは戦災により中止していたねぶたをここに復活させた。現在の「青森ねぶた祭」のルーツともいえるこのねぶたの運行が行われてから、まもなく80年を迎えることになる。

青森のまちの歴史を紐解くなかで、「みなと」「まち」「ねぶた」といったキーワードが浮かび上がってくることに気づく。それはまた、青森に生まれ青森に暮らした人びとの原風景にもつながりうるものといってもよいだろう。

これまでのあゆみを評価しつつも、これから目指すべきあらたな青森の地域像や地域社会の将来像を考える上での一材料に資するため、本稿ではとくに「青森開港」「青森ねぶた祭」など、青森のまちの歴史に関わるさまざまな節目について取り上げつつ、後日のための覚書きとしておきたい。

1 「青森開港」をめぐる

青森の歴史を叙述した文献等において「青森開港」は頻繁に見受けられる用語である。また、江戸時代における「青森開港」について、それが具体的にいつなのか、またどのようなことを指しているのかという問題は別としても、一般には地域の歴史を語るうえでなじみのあるワードとして認識されている場合も少なくないようだ。

歴史史料から次のことがわかっている。寛永 2 年（1625）5 月 15 日、弘前藩 2 代藩主・津軽信枚（のぶひら）が、津軽から江戸への廻船運航を許可する江戸幕府年寄衆である土井利勝と酒井忠世（ただよ）の連署奉書を拝領した。そして翌 3 年（1626）4 月 6 日、信枚が家臣の森山弥七郎に黒印状を与えて青森の町づくりを命じた。外浜地域の商人船を青森へ集中させ、六斎市（ろくさいいち、1 か月に 6 回の定期市）の開催を許可し、青森の町づくりを進めたのである。

この青森の町立ては大きく 3 段階を経てなされたと言われる。寛永期（1624-44）には本町・米町・浜町、越前町・安方町、万治・寛文前期（1658-68）には塩町・蓑（たばこ）町・博労（ばくろう）町、寛文後期（1669-72）には新町・寺町・柳町・鍛冶町が形成された。



【写真 1】藩政時代は廻船問屋が立ち並んでいた旧浜町の表示柱（右下）。旧浜町は現在の青森市安方 2 丁目、本町 2～5 丁目。筆者撮影

現在の青森市の市街は、この藩政時代につくられた碁盤の目のような街区とほとんど変わっていないといわれている。

そして先の幕府年寄衆連署奉書は津軽から弘前藩の江戸屋敷へ御膳米（江戸藩邸で費消する台所米）の廻漕を許可したもので、太平洋海運への参加を促すものとなった。したがって青森開港は、この幕府年寄衆連署奉書にその出発が認められるのであり、弘前藩としても本格的な開発に乗り出すことになった（『新青森市史資料編 3 近世（1）』青森市 2002 年 p3）と評価されている。

このほか青森開港の年をめぐるのは寛永元年、あるいは寛永 2 年などとする説がある（2）が、「青森開港」をどのように解釈するか。この江戸時代における「青森開港」や「青森湊」が一般に話題になるとき、なかには埠頭や岸壁、防波堤などの港湾施設を備えた現在の青森港と同じようなイメージを当時の湊に抱く場合があるように見受けられる。もちろん当時そのような港湾施設は存在しなかったであろうことは、次の史料からも読み取ることができる。

「伊東家御用留」(天明 8 年〔1788〕)(3)の「津軽浦々船澗懸控」にみえる青森と大浜（油川）の湊の特徴である。

- 一、青森 戌、亥、子、丑之風は受、巳、午、未は出風二御座候、東西広く五、六百石より千石積之船懸り場所迄八、岡より凡六、七丁程御座候、海深く十二、三尋も御座候、
- 一、大浜 此所寅、卯、辰受二御座候、甚だ遠浅二而大船は十二、三丁沖二懸ケ申候、

これによれば、青森は東西に広い湊であり、500～1000 石積(4)級の廻船が「船懸り」つまり停泊する場所は陸岸からおよそ「六、七丁(5)」(約 650～760メートル)のところ、水深も「十二、三尋(6)」(約 18～20メートル)と十分あるという。対して大浜は極めて遠

浅で、大型廻船が停泊できるのは陸岸から約 1.3～1.4 キロメートルも沖合の方になる。

いずれにしても当時の青森湊には、大型廻船が停泊できるような陸岸の港湾施設はないため、陸岸から相当離れた青森湾の十分な水深のある地点に停泊し、伝馬船などで陸岸と本船を往復し荷役などを行なう、というのが常だったのである。

江戸時代の「青森開港」とは、港湾施設を建設工事するという意味でなく、青森湊の機能を支え運用していくための港町をハード・ソフトの両面からつくる、と解釈する必要がある。その考え方に基きあえて「青森開港」の年に焦点を当てるならば、寛永 2 年に幕府から廻船運航の許可を得たことを契機に弘前藩主が青森の町づくりを命じた翌寛永 3 年を「青森開港」の年とする考え方は合理的といえよう。

江戸時代の青森のまちの本質は港町、青森湊の機能を成り立たせるのが青森町、この青森の「みなと」と「まち」の両者は極めて密接な関係にある。その点を勘案すれば、来るべき節目の内容について一般に説明・周知する際には、「青森開港 400 年」のほかに、たとえば「青森 400 年」「青森みなとまちづくり 400 年」などの表現についての検討も有意義と考える。

2 「青森ねぶた祭」をめぐって

昭和 22 年（1947）8 月 20 日から 3 日間、青森市、青森市観光協会、青森海運局が共催しねぶたを主とする「戦災復興港祭り」が開催された。これが現在の「青森ねぶた祭」の第 1 回にあたることから、令和 9 年（2027）で「青森ねぶた祭」が始まって 80 年となる。そして翌 23 年（1948）に開催された「青森市制 50 周年港祭り」は前年以上の盛況ぶりで、戦災復興に追われていた市民に新しい活力を呼び起こさせた港まつりであったという。

ねぶたは港町青森を代表する祭りであり、その港町青森の象徴であると、当時の人びとはあらためて胸に刻んだ。それを港祭りというかたちまで昇華させ、その象徴

としてのねぶたを復活させることにエネルギーを注いだのだろうと察せられる。

その後、「青森港祭り」としては昭和 32 年まで 10 年間行われた。新暦による固定した祭り期間（8 月 3 日～7 日）は昭和 30 年から昭和 53 年までで、「青森港祭り」では、おおむね 8 月 3 日に「青森開港の恩人森山弥七郎翁墓前祭（油川浄満寺）」が行われたという。この墓前祭は油川連合町会の運営により現在も行われているが、青森のルーツである「みなと」「まち」の風景が今なお人びとの脳裏に深く刻み込まれている様子をうかがい知ることができよう。

「青森港祭り」は昭和 33 年（1958）に「青森ねぶた祭」と名称を変更、現在に至っている。すなわち、来る令和 10 年（2028）で「青森ねぶた祭」に改称して 70 年となる。

そして昭和 55 年（1980）1 月 28 日、青森ねぶた祭は指定名称「青森のねぶた」として国の重要無形民俗文化財の指定を受けた。令和 12 年（2030）は、この指定を受けてからちょうど 50 年。つまり「青森ねぶた祭」関連だけでもこの 10 年以内に 3 つの節目がやってくることになるのである。



【写真 2】浄満寺(青森市油川大浜)における「青森開港之祖森山翁並油川城主奥瀬家慰霊祭」として行われている墓前祭。森山弥七郎供養碑に線香を手向ける地域住民の方々。令和元年 8 月 3 日。柿崎孝治氏撮影

むすびに

弘前藩の外港として町づくりがはじまったことにルーツをもつ青森。「みなと」「まち」「ねぶた」は港町青森の歴史を読み解くためのキーワードであるとともに、それらはおよそ 400 年間、この地に生まれ暮らした人びとの原風景、あるいは抛りどころでもあったのではあるまいか。そして奇しくも今から向こう 10 年の間に、そのキーワードに深く関わるいくつかの節目を迎えることになるわけである。

繰り返すことになるが、令和 7 年（2025）は幕府から津軽から江戸への廻船運航が許可されて 400 年、令和 8 年（2026）は弘前藩 2 代藩主津軽信枚が森山弥七郎に青森の町づくりを命じてから 400 年、令和 9 年（2027）は「戦災復興港祭り」として青森ねぶた祭が行われてから 80 年、令和 10 年（2028）は「青森ねぶた祭」という名称に変わって 70 年。そして令和 12 年（2030）は「青森のねぶた」が国の重要無形民俗文化財に指定されて 50 年ということになる。

今、目の前にはこのまちの歩んできた道のりをあらためて振り返るとともに、その意義を再確認するための多くの材料が揃っている。それならば、このほかにはない材料をどのように活かし、どのように磨きをかけるか。形があろうとなかろうと、どのように伝え残していくか。青森の先人たちは、物言わずとも今の青森びとに何かしらの課題を与えているのかもしれない。

〔註〕

- (1) そとのはま…現在の青森市辺りから北の陸奥湾

沿岸。

(2) たとえば『新青森市史 資料編 2 古代・中世』（青森市 2005 年）p556 によれば、元和 9 年から築港開始、寛永 2 年、青森開港とするのが正しいと思われる、とされる。

(3) 『青森市史』第 8 巻資料編Ⅱ（青森市役所編 1982 年）、伊東家（屋号は滝屋）は、代々善五郎を襲名し廻船問屋などを営んだ青森の豪商。

(4) 江戸時代、廻船の大きさを米の積載石数であらわしたのが積石数で、その石数に相当する米の重量である。1 石 = 150kg で、千石船とは本来、米を 1000 石（重量トン 150 トン）積むことができる廻船である。

(5) 1 丁（町）は 60 間、360 尺で約 109 メートル。

(6) 尋（ひろ）は慣習的に用いられた長さの単位で一定しないが、和船の場合は 1 尋を 5 尺（約 1.5 メートル）とする。

〔参考文献〕

- 『青森市の歴史』（青森市 1989 年）
青森市史編集委員会『新青森市史通史編第 2 巻 近世』（青森市 2012 年）
宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌 増補版』（青森市 2016 年）
青森観光協会創立 50 年記念事業実行委員会記念誌出版委員会編『青森観光協会 50 年史』（社団法人青森観光協会 2001 年）

3. 観光文化研究センター活動報告

青森大学附属総合研究所 研究員 喜來大智

昨年度に引き続き、「令和3年度国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業補助金（環境省）の「国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業」の採択を受け、以下のスケジュールで事業を実施する予定です。

（掲載写真はいずれも昨年度の様子です）

▼事業名：自然体験型観光を柱とした人材育成および地域循環共生圏構想

▼事業実施スケジュール

1. 【雪国青森・豪雪を活かした新たな観光地域づくり】地域説明会・交流会@青森大学

内容：青森大学観光文化研究センターのあゆみ・今年度実施の雪を活用した冬季事業内容の説明・フィールドツーリズムコース説明（佐々木）、国立公園八甲田山周辺の冬季アクティビティについて（其田）

・日程：2021年10月2日（土）13:30～15:00

・場所：青森大学5105教室

・参加対象：青森市民・行政・観光業者・学校関係者・まちづくり協議会

・受付：13:00～13:30

・スケジュール：

13:30～14:00

「自然体験型観光とフィールドツーリズムについて」佐々木豊志

14:00～14:45

「国立公園八甲田山周辺の冬季アクティビティについて」其田知志

2. 雪板づくり・体験ツアー

内容：雪板づくりと体験を行うプログラムです。雪がない中国・香港や台湾、東南アジアの観光客には札幌

雪まつりや八甲田の樹氷を観る目的で来る人もいますが、中にはスキーやスノーボードの体験を望む声も聴かれています。スキーやスノーボードはスキルが必要なため、体験をするためにはハードルが高くなります。その点、雪板は「誰でも、すぐに、場所を選ばず」に遊ぶことができ、バックカントリーのような体験のハードルを下げ、擬似的に体験することができます。初日は、あらかじめ反りをつけたコンパネを元に、参加者それぞれの発想で形をデザインして、カットし、磨き、ニスを塗り1日でオリジナルの雪板を完成させます。2日目は、モヤヒルズのグレンデで実際に滑走に挑戦して、雪板の滑りを体験します。

・日程：2021年12月18～19日

・場所：青森大学雲谷ヒュッテ

・参加対象：青森市民・行政・観光業者・学校関係者



3. イグルーマイスター育成講座

内容：イグルーづくりを座学と実践から学び雪国青森の新観光戦略であるイグルー王国建設に向けて、長年にわたって野外教育の現場でイグルーづくりに取り組んできた佐々木（青森大学観光文化センター長）がイグルーのづくりの知識と技術を伝え、イグルーをつくることのできる県民・市民を育成することを目的に実施します。

イグルーマイスター認定証は5段階

1. Mitter / 2. Cutter / 3. Stacker / 4.



Adjuster / 5. Meister

- ・日程：2021年12月25～26日
- ・場所：酸ヶ湯温泉
- ・参加対象：青森市民・行政・観光業者・学校関係者

4. 八甲田ロープウェイ山頂駅にイグルーを作る

・内容：雪国青森の新しい観光戦略として八甲田ロープウェイ山頂駅にイグルーを作ります。

・日程：2021年12月27～29日

・場所：八甲田ロープウェイ山頂駅



5. 観光マネジメント演習 in 八甲田山バックカントリー

・内容：モヤヒルズから八甲田山にてバックカントリー



の基礎知識やリスク管理を学ぶ講座と、バックカントリー初心者向け体験および八甲田の自然と歴史を学ぶツアーです。

・日程：2022年1月5～6日

・場所：モヤヒルズ及び八甲田山

・参加対象：青森市民・行政・観光業者・学校関係者・まちづくり協議会



6. 第1回世界イグルー選手権

・内容：多くの市民に「イグルー」を知ってもらい、雪に対するイメージを変える市民参加のイグルーづくりのイベントとして実施します。審査基準（技術・独創性・チームワーク・完成度）で審査し、各チームを表彰します。夜はイグルーをライトアップします。

・日程：2022年2月5～6日

・場所：モヤヒルズキャンプ場・雲谷ヒュッテ

・参加対象：青森市民・行政・観光業者・学校関係者





4. SDGs 研究センター活動報告

SDGs 研究センター センター長 藤 公晴

1. 初年度科目「学問のすすめ」における廃棄物削減 アクティブラーニング導入②

前回の総研だよりで「初年度科目「学問のすすめ」における廃棄物削減アクティブラーニング導入」（担当：沼田 郷先生、宮川 愛子先生、緑川 章一先生、小松 一先生、小職）で骨子を紹介したが、今回あらためて経緯と内容を整理した上で、その効果と振り返り、次年度に向けた課題を整理する。

まず、本取り組みの発端は、SDGs 研究センターの令和2年度成果の一つ「青森大学の教育の質向上に関する提案書」（学長承認 12月12日）において、教育の質向上にかかる3つの分野（初年度教育の充実、正課外教育の拡充、内なる国際化）に盛り込んだことにある。

同提案書では、入学直後の「学問のすすめ」において、廃棄物の収集活動をSDGsや学びの分野に関連づけて行うことで次のような利点がある点を述べた。①身近で身体を動かし達成感を得ることのできる点、②活動を通して教職員や同級生と親交を深めることができる点、③わかりやすい地域貢献活動である点、④学内のポイ捨ての未然防止を含む学生の倫理観向上につながる点、⑤種類ごとに計量し成果の可視化を通じたPRやSDGsと関連づけた学習材料（学習意欲の向上）にもつながる点、である。また、この雪解け後の週末、多くの自治体や町会で同様の活動を行うことから、住民や関係者と親交を築く機会にもなる。

コロナ禍であったが、3月中に担当教職員や関係機関と準備、調整を図りながら基本計画と実施体制を固めた上で、4月以降は4月24日の大学キャンパスと周辺地域、夏泊半島大島4カ所のフィールドワークの実施に向けて、廃棄物収集にかかる背景や動機づけ、意味づけ、諸準備を講義で行った。各講義では、講義内容に加えて、集合場所や記録作成、グループ分け、

レポートの作成方法など細かな連絡事項があった。その為、これらの振り返りアンケートを毎回実施し、その結果を次の講義冒頭で共有し、個々の回答結果に対する相対的な捉え方を育みつつ、受講生の理解度を一定レベルに維持するよう心がけた。

第2回の講義（4月16日）で、廃棄物と人間の関わりや関連制度、先進事例として鹿児島県大崎町の取り組みを紹介し、さまざまな他者と意思疎通を図りながら、地域の課題の解決・改善に向けて関わり合うこと、そのための能力を育むことが個々の主観的幸福感の醸成にもつながるという内容で、単なるゴミ拾いに止まらない学習機会であることを伝えた。その上で、フィールドワーク前日の第3回の講義で、SDGsやルーブリックの紹介と、アクティブラーニングに向けた学び方の変遷を説明した。次ページは、第2回講義後に実施した振り返りアンケートの一部で、地域課題に関わることと主観的幸福感の相関にかかる学生の捉え方の結果である。

今後に向けた振り返り（たたき台として）

この課題の成果物として、受講生各自が所定の様式（下記参照）に沿って写真付きレポートを作成した（アプリケーションを扱えない学生は別の書式に入力した）。その中で、希望者26名が大学祭で成果物を展示する予定であったが、今般の大学祭中止を受けて、大学ホームページの一角にデータで公表する方向で準備を進めている。今回の全体的評価にも関係するが、担当教員の当初の予想を大きく上回る割合で驚いている。また、成績評価も全体的に高かったようで、この主因として各学部の担当教員が配属された点と、教務課を中心とするスタッフの補助があったことが考えられる。今回の方式は、今後2年間は継続する見通しである点も踏まえて、他の担当教員や関係職員の見解を参考にしながらより慎重な評価を行う予定であるが、次年

27. 鹿児島県大崎町の廃棄物削減による地域活性化の取り組みの事例を通して、このような地域の課題の解決に関わることはその人の主観的幸福感の向上につながると感じますか？

詳細

● つながると思う	121
● どちらかといえばつながると…	76
● どちらかといえばつながらな…	10
● つながらないと思う	2
● わからない	13



28. 大崎町の事例を通して、地域の廃棄物の課題解決に関わることは、主観的幸福感の5領域のどれに関係するのでしょうか？

以下の中から各自二つ選んでください。

詳細

● ポジティブな感情（楽しさ、…	75
● 物事への積極的なかわり（…	59
● 他者との良い関係（支え合い…	127
● 人生の意味や意義の自覚（使…	72
● 達成感（目標、挑戦する機会）	61



度に向けた改善点としては、次の5点が挙げられる。

まず、アクティブラーニングのカリキュラムへの組み込み方と実施にかかるスキルが挙げられる。250名強の講義であるが、受講生同士のコミュニケーションを講義中に盛り込むことへの期待は、前述の振り返りアンケートでも示されていた。こうした教授法上の能力向上は不可欠である。

次に収集した廃棄物の計量の手法である。4つの異なる場所で、冬季

新品のような形で残された1つの青い漁具
～潮風匂う春の平内町夏泊半島～

廃棄物のストーリー

私は、4月24日に平内町夏泊半島に行きました。各グループで生活ゴミと漁具をそれぞれ別の箱に集めた。その中には、青い漁網が多かった。その中には、木などに絡まっていた「フイ」（プラスチック製）や「フラスチック製」の破片になって残らばっているものが集まりました。

「フイ」は、漁網を浮かせる以外に用途がないと思うので、必要がなくなったら、そのままだに放置し、安らぎを持って沿岸に流れていくと、フイを洗い取ってくれる方が集ります。個人が出来ることは、漁網を浮かせるのがよいと思います。

「フラスチック製」の破片は、漁網を浮かせるために使われる

「フイ」(平内町夏泊半島)
「フラスチック製」(プラスチック製)
夏泊半島沿岸
漁網を浮かせるために使われる

※ 本講義の目的は、地域の課題解決と個人の非認知能力向上、そのための自己分析の三つを関連づけて実施し、各分野のテーマ紹介等を行ったが、自治や権利、責任、参加という社会課題の解決にかかるシチズンシップの考え方は、初年度教育における本講義の趣旨と位置づけを考えると、より明示的に伝えることが重要ではないかと振り返っている。

4つ目は、上記を踏まえた初年度の共通体験としての意味づけ、カリキュラムマップ上での関連づけである。この点については、担当教職員だけでなく、尖った大学の初年度教育のあり方、進め方について、本学の学生の傾向を捉えながら、多くの教職員を巻き込んだ議論と参画が求められると考える。

た学生も多数いた。このように計量する対象が多岐に渡り、計量後の比較対象の意義そのものが希薄と考えられるので、この点については関係教員の知恵を借りながら整理する。

3つ目は本講義のコンテンツに関係することで、シチズンシップ教育の位置づけ、関連づけである。本講義では廃棄物という社会の課題解決と個人の非認知能力向上、そのための自己分析の三つを関連づけて実施し、各分野のテーマ紹介等を行ったが、自治や権利、責任、参加という社会課題の解決にかかるシチズンシップの考え方は、初年度教育における本講義の趣旨と位置づけを考えると、より明示的に伝えることが重要ではないかと振り返っている。

4つ目は、上記を踏まえた初年度の共通体験としての意味づけ、カリキュラムマップ上での関連づけである。この点については、担当教職員だけでなく、尖った大学の初年度教育のあり方、進め方について、本学の学生の傾向を捉えながら、多くの教職員を巻き込んだ議論と参画が求められると考える。

以下に第 2 回と最終回の講義で実施した振り返りアンケートの結果概要の QR コードを参考までに貼り付けた。

第 2 回講義
振り返りアンケート



最終回講義
振り返りアンケート



2. シリーズ勉強会「火の文明学」

「2050 年の温室効果ガスの排出ゼロ」を目指す脱炭素社会。COVID-19 後のグリーンリカバリーとして、2021 年 6 月「地域脱炭素ロードマップ」と新たな「森林・林業基本計画」そして「第 6 次エネルギー基本計画」の策定が進む中、都市との関係性も視野に入れた地域社会（エネルギー受給）のあり方、仕組み、各分野の役割がこれまで以上に具体的に示された。こうした動きを注視しつつ、「火」の文化的・社会的位置づけ、地域の高等教育機関の教育コンテンツのあり方について、各分野の専門家や実践者を交えながら広く学び合う機会をシリーズでこれまで 4 回実施してきた。

勉強会の前半は人類史における火の使用、その発展について学んできたが、後半は今後の社会の仕組みや、食と教育における今後の火の位置づけと意味づけについて、各方面の専門家や実践者を迎えたテーマ設定にする計画である。

【これまでと実施予定の勉強会】

第 1 回（5 月 28 日）「いのちと火 日本神話から始めて」

講師：林 亨氏（野辺地八幡宮 宮司、青森県神社庁 教化委員長）

第 2 回（6 月 25 日）「人類の進化と火」

講師：動物考古学者 鶴沢 和宏 氏（東亜大学 副学長）

第 3 回（8 月 6 日）「火と日本人の暮らし～民俗学の視点から～」

講師：石戸谷 勉 氏（日本民俗学会員、青森市教育委員会 世界遺産推進室）

第 4 回（10 月 2 日）「ボタニカルキャンドルづくりと焚き火トーク」

講師：YOAKENOAKARI 安田 真子 氏

第 5 回（10 月 29 日）「在来作物保全、焼畑、火と食」

講師：江頭 宏昌 氏（山形大学農学部教授、山形在来作物研究会）

第 6 回（11 月 19 日）「脱炭素時代のバイオマスの位置づけ」(仮)

講師：泊 みゆき氏（NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク）

第 7 回（調整中）「ユニークな炎、楽しさ、自然への畏敬」(仮)

第 8 回（調整中）「火育の展望、対談」(仮)

第 9 回（調整中）「まとめ、教育の役割、方向性」(仮)

3. グローバル英語（実践大学とのオンライン・マンツーマン英会話レッスン、鹿内 史講師と共同）

昨年度同様、台湾の協定大学、実践大学応用外国語学部の協力のもと、同大学の英語教授法専攻の学生によるオンライン・マンツーマン英会話レッスンを 11 月上旬から 12 月中旬にかけて計 10 回実施する予定で諸々の調整、準備を行っている（同レッスンの効果については、総研だより第 2 巻第 6 号の p7～8 を参照）。今年度、本講義の履修者数が 15 名程に増えた。また、今年度は実践大学側から、本学学生による日本語会話のレッスン実施のリクエストを受けたため、日本語教育センターの協力支援のもと、試験的実施の準備を進めている。これらの学生によるオンライン・マンツーマン教育の試みは、過去の総研だよりで触れた通り、オンラインによる語学教育という可能性だけでなく、英語教授法(TESOL- Teaching English to Speakers

of Other Languages) を学ぶ海外協定大学の学生による実習・演習として、本学の英語教育の一部を担う可能性を示している。この点は、現在本学で実施している日本語教員養成プログラムの履修者が海外協

定校の日本語習得を目指す学生らに対して、同様の指導ができる可能性をも示していることから、令和4年度にはより体系的なオンライン・マンツーマン語学レッスンの実現を目指したい。

5. SDGs 研究センター薬学部・活動報告－令和3年度・薬学部卒業研究発表会

SDGs 研究センター員 薬学部 大越 絵実加

令和3年度9月1日(水)、出来る限りの新型コロナウイルス感染症対策を行ったうえで、薬学部卒業研究発表会が開催された。

この会は【青森大学の理念 地域と共に生きる大学、学生中心の大学】に基づき、薬学部、青森山田高校、青大 SDGs 研究センター及び社会連携センターが協働した高大連携の一環として、附属校の高校生28名の発表会への参加が予定されていた。しかし青森県の「新型コロナウイルス感染症緊急対策パッケージ」(9月1日-30日)の要請を受け、残念ながら今年度は、見送られることとなった。附属校の高校教諭から、附属出身者の薬学生の成長を直接目にする機会を得られなかったことに落胆の様子がうかがえた。

高校の参加があった昨年度の発表会では、附属校出身者の薬学生は、高校教諭の前での研究発表にかつての思いを巡らし感慨にふける場面が見受けられた。この取組は、高校から大学、そして社会へ歩みを進める生徒・学生の成長を、ステークホルダーが身近に感じる

ことができる、附属校の強みと言える。

高大連携による薬学生の利点は、文部科学省「薬剤師として求められる基本的な資質」(コミュニケーション能力, 研究能力, 自己研鑽, 教育能力)の習得と、高校生の参加でつちかわれる薬学生の模範意識の醸成である。これは、青森大学ディプロマ・ポリシーを反映している。薬学部は、地域社会のニーズを踏まえた質の高い高等教育機会の確保と、高い能力をもった人材育成に取り組む体制の構築によって、地域連携プラットフォームとなる大学の役割を支える一助となっている。

この開催に当たり、大学事務局、清掃の方には、会場整備(設営および原状復帰、教室床の水拭き等)など多方面にわたる協力を得た。おかげで、発表する薬学生や薬学教員は最後まで発表の準備・対応に集中することができた。関係各位には、この場を借りて深謝申し上げる。コロナ禍において先行き不透明な状況の中、引き続きお力添え頂ければ幸甚である。





6. ねぶた解体・特定非営利法人ほほえみの会と連携「青森ねぶた SDGs プロジェクト」

青森大学附属総合研究所 研究員 喜來大智

◎ねぶた解体

観光文化研究センター・SDGs 研究センター事業として 8月28日（土）～29日（日）にねぶた解体に協力した。新型コロナウイルスの影響で今年も中止となった青森ねぶた祭。今年制作された9団体のねぶたは8月27日（金）に「心に灯せ・ねぶた祭」と題しオンライン・青森ケーブルテレビで配信された。また、青森朝日放送の密着取材があり、本プロジェクトの様子は10月下旬頃に7分ほどの番組になる予定だ。

今年の青森山田学園ねぶたの解体では和紙、木材、配線、LED 電球を分別して回収を行った（学生7名参加）。また、運行団体の「に組」からも和紙を提供していただいた。

写真は解体の様子。骨組みは再利用する。



◎ **特定非営利法人ほほえみの会と連携**

就労支援 B 型事業所の「特定非営利法人ほほえみの会」と連携して、ねぶた和紙を使った商品づくりを実施する。うちわ 100 枚の制作を依頼した。利用者の方は最初から完璧な形を目指そうとしたため、「難しそう」

「出来ない」と言うのが第一印象だったが、結果としては最初から最後の行程まで携わり完成することができた。障害の特性により作業に得意・不得意があり、利用者に合わせた作業分担が必要だと気づいた。

7. 本年度の幸畑プロジェクトーハッピードラッグ青森幸畑店とのコラボ

青森大学は 2013 年度、交流をベースとした教育・研究・地域貢献プロジェクト「幸畑プロジェクト」をスタートさせた。「地域とともに生きる大学」として、最も身近なパートナーである幸畑地域の方々、さまざまな分野で協働を進める取り組みである。

授業では例年、総合経営、社会、ソフトウェア情報の 3 学部横断のキャリア特別実習や、社会学部の地域社会調査法、社会調査実習などを受け皿として、学生の参画を図ってきた。

本年度のプロジェクトは、株式会社丸大サクラ薬局との連携という新たな進展を見せた。きっかけは 2021 年 3 月のハッピードラッグ青森幸畑店オープンだった。

2020 年度の社会調査実習は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大の中で地域づくり活動を進めた幸畑団地地区まちづくり協議会をテーマに実施した。3 人と最小限だった履修者が、進路変更に伴って 2 人に減った上、前例のないコロナ禍の中で、実習は多難ながら実り多いものとなった。

そこで、過去の社会調査実習と同様、成果を学会で発表することにした。筆者が所属する東北地理学会の 2021 年度春季学術大会（2021 年 5 月、オンライン開催）を発表の場を選んだ。なお、学会の名称には「東北」とあるが、東北大に事務局を置いていることにより、研究・発表領域は東北に限定していない全国規模の学会である。ただ、発表に際し、直近の動きを報告する必要を感じ、出店の経緯を、2021 年 5 月に同社へヒアリングすることにした。

同店が進出した敷地は、幸畑団地で長く営業を続けて親しまれたスーパー「ママショップ」の跡地である。その跡の更地は、地元の人々にとってある種の傷跡だった。更地がドラッグストアになったことは、更地の解消と、新店舗の進出という、二重の喜びを地元にもたらした。ヒ

社会連携センター員 社会学部 櫛引 素夫

アリング時、これらの事情を同社に伝えるとともに、幸畑団地地区まちづくり協議会の活動などを紹介したところ、多大な関心を示された。

もともと、同社は本学の薬学部と連携を強めてきた。「ドラッグストアにおける薬剤師の役割」をテーマとする津田岳夫准教授らの研究では、ハッピードラッグ 5 店舗の店頭で来店者へのアンケートを実施している。また、同社が本学薬学部生を対象に実施したセルフメディケーション小論文コンペには 25 人が応募、13 人が入選している。このため、本学が所在する幸畑団地への出店に際しては、地域との新たな関係性づくりを強く意識してきたという。

その後、同社と社会連携センターが具体的な連携策を協議し、環境が整ったテーマから逐次、実行に移している。幸畑プロジェクトは、その連携の柱の一つと位置付けられた。

内容的には、本学を介した幸畑団地地区まちづくり協議会と同社の直接的な協力が生まれつつあり、例えばハッピードラッグ青森幸畑店の駐車場を活用した軽トラ市などの構想が浮上している。

教育・研究面では今年 9 月初め、社会調査実習を履修する学生のうち 2 名が、同店の全面的な支援を得て、住民アンケートを実施した。幸畑団地での居住歴や買い物の頻度、幸福度などを問う内容で、QR コードを記載した質問票を 2 日間、店頭で配布し、筆記でもネットでも回答できるようにした。調査時は青森県内でも新型コロナウイルス感染症が急拡大しており、薬学部の専門家の助言をいただき、感染防止には万全を期した。

同店の配慮で、アンケート回収箱のほか、消毒液や筆記用具の準備といった配慮もいただいた。また、学生による配付終了後も、同店が独自に調査票をコピーし、店頭で配付・回収した。

店頭では、「青森大学」ののぼりを見て、「今度は何の調査をしているんですか？」と声を掛けてくれる人、「私の子どもも青森大学卒業で…」と話しかけてくれる人などが多く、「地域とともに生きる大学」が地元ですっかり浸透している様子をあらためて確認できた。調査票を渡す際、「青森大学の者です」と最初に名乗ると、受け取ってもらえる確率が高くなることから、その思いを強くした。

幸畑地域の人々を対象とした調査は 10 月、第二弾として、ネット経由で実施する予定である。学生たちが見いだした成果については、あらためて報告する。



◇総研日誌（2021年7月1日～2021年9月30日）

▽7月21日（水）

・Café 総研：社会学部・石井重成准教授
「地方創生の現在地と青森大学で挑戦したいこと」

▽7月30日（金）

・2021年度第4回運営会議

▽8月6日（金）

・SDGs 研究センター・シリーズ勉強会「火の文明学」第
3回「火と日本人暮らし-民俗学の視点から」（石戸谷

勉氏＝青森市教育委員会文化財課・世界遺産推進
室）

▽9月16日（木）

・2021年度第5回運営会議

▽9月30日（木）

・Café 総研：ソフトウェア情報学部・角田均学部長
「環境活動のためのアプリ開発 – 実用的なソフトウェア
を作る –」

※前号の総研日誌に、次の記載が抜けていました。お詫びして追加します。

▽6月4日（金）

・Café 総研：総合経営学部・沼田郷教授
「光学産業の移転プロセスとその解明 – 北東北地域を中心に –」

◇編集後記

「総研だより」第3巻第2号をお届けします。

今号は、青森ねぶた健康研究所の瀬谷司先生がご
寄稿くださり、また、9月に本学の客員教授になられた
ばかりの関晃子先生も、青森のまちの成り立ちに関する
興味深い文章を寄せて下さいました。SDGs 研究セン
ターからは3編の活動報告があり、活動の広がりが実
感されます。

大学祭が中止となる一方、ワクチン接種の効果もあ
ってか、新型コロナウイルス感染症の第5波は収束に
向かっています。間もなく感染が初めて確認されて丸2
年、まだまだ今後の展開は予断を許しませんが、「ポス
トコロナ」の世界を探りつつ、歩き続けるしかありません。
皆さまの教育・研究・社会貢献活動に関する論考や記
録、コラムなど、ぜひ、お寄せ下さい。 （素）